

本郷先生と菌類事始め

浅井 郁夫

1998年頃までは、春秋にはハイキングを兼ねた山菜狩りやきのこ狩りを楽しんでいました。当時の私にとっては、きのこといえば、単に秋に採れる山の幸の名称に過ぎなかった。食用にならないきのこについてはあまりよく知らなかった。当時は「食毒」の書かれていない図鑑など図鑑にあらず、とさえ思っていた。

アミロイドって何？

ある年の秋、ブナ林を歩いていると、黄色い小さなきのこが絨毯を敷いたように一面に群生していた。しゃがみ込んでよく見ると、その小さなきのこはブナの殻斗からでていた。ナメコを取るのも忘れて、しばらくその黄色い小さなきのこに見入っていた。そのきのこをタップウエアに入れ大事に持ち帰った。

山から戻ると、直ちに食用きのこの処理をし、食毒不明のきのこだけ図鑑と照合するのが常だった。ところが、このときは、まず最初にブナの殻斗からでていた小さなきのこの「名」を調べていた。手元にあった山溪カラー名鑑『日本のきのこ』のキシメジ科の項にウスキブナノミタケという名称で写真が載っていた。

ウスキブナノミタケの解説文に妙なことが書いてあった。「胞子は(中略)、若いときは粗面でアミロイド、成熟すれば平滑で非アミロイド」北アメリカではクルミ科の堅果から発生するという。なぜかこの文面が妙に心に残った。当時は、アミロイドが何のことやら明確には理解していなかった。山溪カラー名鑑

にも「用語解説」が1ページだけあったが、そこにはアミロイドという用語の解説は無かった。

そこで、山溪フィールドブックス「きのこ」の用語集をみると、メルツァー液という項目のなかに「呈色反応によりアミロイド、偽アミロイド、非アミロイドの3つに分けられる」と書かれていた。当時持っていた他のきのこ図鑑には、アミロイドなどといった用語は載っていなかった。それはそうである。きのこ狩りのための図鑑にアミロイドなどという用語が載っていないはずはなかった。

初めて「本格的」図鑑を購入

おりしも、この年千葉菌類談話会の観察会が泉自然公園で行われ、そこに本郷先生が来られることを聞いた。そこで、千葉菌類談話会に加入し、期待に胸を膨らませて泉自然公園に行った。本郷先生は、初心者に対してもメルツァー液のことやアミロイドなどの概念をていねいに説明してくださった。本郷先生とお会いしたのはこれが最初だった。数日後に保育社『原色日本新菌類図鑑(Ⅰ)(Ⅱ)』を購入した。これが、初めての「本格的」図鑑であった。

自宅には数年前に妻が購入した顕微鏡があったので、採取したウスキブナノミタケを、若い菌～成菌～老菌で、胞子がどうなっているのかを調べた。保育社の図鑑に書いてあることと、自分の観察結果には大きな隔たりがあった。おまけに保育社の図鑑には、知らな

い用語が次々と出てくる。ところが、図書館で探しても、これらの概念を日本語できちんと解説した本はなかった。

数年にわたりウスキブナノミタケの胞子とアミロイドについて本郷先生に質問

1999年10月泉自然公園で行われた千葉菌の観察会には、本郷先生が見えられた。早速、ウスキブナノミタケの胞子とアミロイドの件をたずねた。先生の答は「それは、あなたの観察が足りないからです。きちんとていねいに観察すれば、図鑑にあるように、若い胞子は粗面でアミロイド、成長すると平滑で非アミロイドになります」とのことだった。当時は、「そうか、きちんと観察できていないことが原因なのか」と思った。

2000年の観察でも、やはり図鑑に書かれたような結果は得られなかった。9月に行われた泉自然公園での千葉菌観察会で、再び本郷先生にそのことをたずねた。先生は「ブナではなく、サワグルミの堅果に発生するきのこで確認すれば、きっと図鑑にあるような結果が得られると思います」とのことだった。サワグルミ堅果に発生する黄色い *Mycena* を探しては調べたが、胞子はすべて非アミロイドだった。

2001年9月、再び泉自然公園で先生にたずねた。この時は、海外の具体的な論文内容も踏まえての質問となった。同じことを執拗に繰り返し尋ねるので、先生は呆れながらも「実は、(保育社図鑑の)ウスキブナノミタケの項は、直接自分の目で確認したものではなく、横山先生の書かれたもので、詳しいことはよくわかりません」とのことだった。また、「きのこについては、わが国では研究が非常に遅れていて、いまだに目の前にあるきのこの多くが名無しのままです」と強調された。

「菌類としてのきのこ」の世界に足を踏み入れる

この本郷先生との会話がきっかけで、菌類としてのきのこが如何に未開の世界であるかを実感として知ることになった。この年「きのこ狩り」は終わりを告げ、「菌類としてのきのこ」世界に足を踏み入れることになった。

こうして2001年は私にとって菌類事始めの年となった。きのこ図鑑は身近から一掃した。とりわけ「××県のきのこ」といった書は、『石川県のきのこ図鑑』1冊を除いてほとんど処分した。きのこのことはすべて忘れ、生物学と菌類学の基礎、菌類研究法などを学びはじめた。日本語で書かれた文献は乏しく、もっぱら洋書に頼らざるを得なかった。

振り返ってみると、菌類世界の楽しさ・奥深さを知ることができたのは、本郷先生のおかげである。もはや本郷先生にお尋ねしたり、カラオケで一緒に楽しむことはできなくなってしまった。本郷先生、安らかにお休み下さい。